

新人看護師の臨床実践能力の向上に資する看護チーム内の社会的相互作用に関する研究

著者	保田 江美
学位授与年月日	2018-01-19
URL	http://doi.org/10.15083/00077762

審査の結果の要旨

氏名 保田江美

保健医療を取り巻く環境は日々、めまぐるしく変化している。新たな治療方法、看護手法が次々うまれ、医療機関のなかで実践されている。このような状況に対応するべく、看護師は自らの臨床実践能力を常日頃から向上させつづけることが求められており、医療機関は、そうした看護師の継続的学習を維持・継続させていくことめざしている。一般に、看護師の臨床実践能力は、日々の仕事を通じて学習される。具体的には、看護師は、自らが所属する看護チーム内の仕事や社会的相互作用を通じて、短期間のあいだに能力向上を果たすことが求められている。

本論文は、新人看護師の臨床実践能力の向上に資する場として看護チームに注目するものである。論文の目的は、新人看護師の臨床実践能力の向上に資する看護チーム内の社会的相互作用のあり方を実証的に探究することにある。

第1章では、看護教育の発展の歴史をひとつと概観し、時代の変遷とともに、看護師の継続的学習を支えていくための組織的支援の必要性が増していることを論じてある。とりわけ新人看護師の学習に関しては課題も多く、喫緊の対応が必要であることが指摘されている。

従来、新人看護師の臨床実践能力の獲得に関しては、プリセプターシップという制度による支援がなされてきたが、必ずしも熟達していない若手看護師がそれを担うために、制度自体が機能不全に陥っているという指摘も多い。本性では、新人看護師の臨床実践能力の獲得は、プリセプターシップを通してだけでなく、日常の看護チームでおこなう日々の看護実践の中に埋め込まれた社会的相互作用のなかで促されていることを指摘している。

第2章では、冒頭、看護師が日常的に仕事をする「看護チーム」の典型的な組織構成を示した。看護師が日常的に業務を行う看護チームでは、中堅看護師による指導・支援（中堅看護師-新人が1対1で行う支援）と、看護チーム全体のチームワークによって達成される指導・支援（新人に対してチーム全体がおこなう支援）の2種類に大別されることを示した。以下3章・4章で展開される実証研究を、これらのフレームワークで行うことを提示した。

第3章では、前者、すなわち中堅看護師から新人看護師に対する支援のあり方に着目し、どのような支援が新人看護師の臨床実践能力を向上させるのかを実証的に研究した。データからは、内省支援、業務支援、精神支援、目標支援の4種類の支援が、臨床実践能力の向上に資するメカニズムを示すことができ

た。

第4章では、後者、すなわち看護チームのチームワークが新人看護師の臨床実践能力に示す効果を測定した。データからは、チーム・リーダーシップ（シェアド・リーダーシップ）が、新人看護師の臨床実践能力の向上に資するチームワーク形成の基盤となることなどが示された。

第5章では、第3章と第4章で得られた知見を統合し、看護チーム内の社会的相互作用が新人看護師の臨床実践能力に及ぼす影響について総合考察をおこなった。新人看護師の臨床実践能力の向上に資する看護チーム内の社会的相互作用は、いわゆる「シェアド・リーダーシップ」の発揮によって達成されることがわかった。論文の最後には、今後の研究課題や将来の研究構想についても述べた。

以上、本論文は、「新人看護師の育成」という極めて社会的ニーズが高く、また、これまであまり探究されてこなかったオリジナリティある課題を、2つの実証研究を通して探究したものである。論文の学術的価値は審査委員一同で高く評価されたが、しかしながら、残された課題もないわけではない。

審査に当たった教員からは、1)論文中で用いられている「オーナーシップ」の概念についてリーダーシップとの関連性をより明瞭に述べるべきだったのではないかという意見、2)看護師の学習を、徒弟的学習の観点から考察・解釈するべきだったのではないだろうかという意見、3)一般的な職能発達の研究知見と本研究知見を対象づけることで、看護現場の育成に特化した知見をより明瞭に書くべきだったのではないかという意見などが付された。当日は、これらの諸課題について、受験者と審査員の間で活発な質疑応答がなされた。

質疑応答においては、受験者からの的確に回答がなされた。しかし、一部には、まだまだ考察が足りてない部分があったことは否めぬ事実である。しかし、論文の構成・構造は明確であり、実証研究部分でも確かな方法論で研究を遂行できている。社会的ニーズの高い課題に対してオリジナリティの高い解を提供できたことには意義も認められる。

先般の諸課題は、受験者が次なる研究を通じて十分深化可能であり、かつ、受験者が今後の研究生活をかけて探索可能であると考えて、審査員満場一致にて、本論文を博士（学際情報学）の学位請求論文に値すると認めた。